

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Textile Culture in the Central Andes : A Note from the Viewpoint of Cultural History

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井, 龍彦 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004603">https://doi.org/10.15021/00004603</a>

## 中央アンデス地帯の染織文化

—その文化史的観点からの一考察—

藤 井 龍 彦\*

- |                |                 |
|----------------|-----------------|
| I. はじめに        | III. 草創期以降の染織文化 |
| II. 先土器時代の染織文化 | IV. おわりに        |

### I. はじめに

中央アンデス地帯の先スペイン文明——いわゆる古代アンデス文明——が栄えたペルーの海岸地方は、沿岸を流れる冷たいフンボルト海流の影響で、年間を通じてほとんど降雨がなく、全くの砂漠となっている。砂漠を横切ってアンデス高地から流れ下るいくつもの川がある。川の流域のオアシス地帯が、先スペイン時代から現代にいたる人類の活動舞台となっている。このような特異な自然環境のために、一般にはきわめて遺存しにくい、古代の繊維・木製品などの有機遺物が、紀元前数千年という古いものも含めて、かなり良く保存されている。これらの有機遺物の中で、最も数多く出土し、また人びとの注目を集めているものとして、染織品がある。

古代アンデスの染織品は、博物館や美術館あるいは展覧会などにおける展示、多くの美術書などを通じて、織り方・文様の多様さ、紡績技術の優秀さなど、その質的な高さが評価されている。アメリカ合衆国の人類学者で、古代アンデス文明研究者としても名高い A. L. Kroeber は、古代アンデスの染織品に関して「現在世界で知られている染織品の中で、このように優れたものは他に例がない」と書いている [KROEBER 1949: 414]。質の高さと共に驚くべきはその数量で、正確な数は不明であるが、現在世界中には、断片も含めて十万点を越す古代アンデスの染織品があると思われる。

また、中央アンデス地帯の高地では、現在なお、先スペイン時代からの伝統的な素材・技術で、染め、紡ぎ、織りが行われている。一つの地域で、紀元前数千年から現代にまでわたる、きわめて長い文化の発展が観察できるというのは、世界に例が少ないといえる。

以上のように、中央アンデス地帯における染織文化の研究は、1)特異な自然環境に

\* 国立民族学博物館第4研究部

より、きわめて古い時期のものから連続して資料が遺されている。2)染織品の質の高さ、量の膨大さからみて、高度の発展を遂げている。3)先スペイン時代の技術伝統の一部は、現在の原住民文化の中にも連続しており、民族誌的データが使用可能である、という3つの点から考えて、その意義は非常に大きいものである。

中央アンデスの海岸地方で、古代の染織品が出土することは、19世紀半ばにすでに記録されており [SQUIER 1869: 21-22]、当時、偶然にせよ意図的にせよ、古代の遺物の発掘が行われていたことを示している。後述のように、先スペイン時代には、死者を染織品で包んで埋葬する風習があった。当時の墓地は、集落周辺の砂漠の中に営まれた。乾燥した砂漠は、染織品の保存という面では利点であったが、無秩序な発掘が始まると、かえって簡単に掘れるということが禍いして、砂の中の墓は次つぎと荒されてしまった。古代の遺跡の破壊・盗掘は、16世紀の征服直後から行われている。初めのうちは、黄金を求めて神殿やマウンドがその対象となった。海岸の墓地は、砂に覆われてその存在がはっきりしないこともあり、初期の盗掘は免れていたであろうが、前述のように19世紀半ばには、すでに掘荒されるようになっていた。出土した染織品、土器、金属器、装飾品などは、盗掘者の手から好事家を買取られ、その多くはヨーロッパやアメリカに流出していった。

学術的な発掘調査も、もちろん行われている。染織文化研究史の上で重要なものは、1903年～1905年にかけて、M. Uhle が北の Moche 川から南の Nazca 川にわたる広い範囲で行った調査、J. C. Tello が Paracas 半島で2つの大墓地を発見した1925年の調査、J. B. Bird による先土器時代の Huaca Prieta の調査をはじめとする、アメリカのアンデス研究所の一連の調査、F. Engel による系統的な先土器時代の遺跡の調査などがある。Uhle の発掘した資料は、後にカリフォルニア大学に送られ、A. L. Kroeber, L. M. O'Neale を中心とした学者により分析・研究が行われた。いっぽうヨーロッパでも、R. D'Harcourt などにより研究が行われた。1920～30年代は、古代アンデス染織品研究がいっせいに開始された時期であった。その後も、調査あるいは過去の資料の整理が進むと共に、J. B. Bird, I. VanStan, J. M. Vreeland などの研究者も加わって、次つぎと新しい研究、報告がなされている<sup>1)</sup>。日本においても、最近になって角山幸洋、中島章子などの染織の専門家が、古代アンデスの染織品に関する研究を発表している [角山 1964, 1971, 1972, 1973, 1974, 1975, 1977; 中島 1970a, 1970b, n. d.]。また、古代アンデスの染織品を、古代美術あるいは原始美術としてとらえた研究も行われ、多くの美術書が日本、欧米で出版されている。

以上、ごく簡略に古代アンデスの染織品の研究史にふれたが、これらの研究は主として、染織品資料の細かい分析に基づいた純技術的な観点からのもの、あるいは表わ

1) それぞれの研究報告に関しては、以下の本の文献欄を参照されたい [BENNETT & BIRD 1960; MASON 1957]。

された文様の比較研究といった様式論的な観点からのものが大部分を占めている。この原因としては、一般に研究の初期にみられる事物そのものを対象とした分析・記述ということがあろうが、もう一つ、対象資料の多くが、学術的な発掘調査法が未確立の時期に出土したものや、盗掘によるものであったことが考えられる。このような形で出土した資料は、正確な出土地、出土状態、遺物間の共伴関係、層位関係などの基本的なデータがしばしば欠落しており、研究進行上の大きな障害となっている。その結果、研究の方向はそれぞれの染織品に固有の染織技法、文様などを対象とした、技術的・様式論の観点にたったものにならざるを得なかったのであろう。この2つの観点からの研究は、もちろん基本的なものであり、重視されねばならない。しかし、古代アンデス文明において染織文化が持つ特異性、豊富な資料を考えた時、この2つだけに偏ったものに限らず、より広い視野での問題点の設定と、その解決への努力が必要であろう。

本稿は、これまで一部の専門家によってのみ研究が行われ、他の人びとにとっては美術品として単に鑑賞の対象でしかなかった古代アンデスの染織品を、従来の技術論・様式論のレベルから、より広く文化史の中でとらえなおし、古代アンデス文明の一層の理解への方向を探る試みとして書かれたものである。このような問題提起は、すでに A. H. Gayton, J. M. Vreeland により行われている [GAYTON 1961; VREELAND 1974]。Gayton は、染織品を「生産」、「機能」、「美しさ」の3つの視点でとらえた分析を行っている。生産の面での素材から製品までの一貫したいわば「染織産業」としてのとらえ方、機能の面での社会・経済的側面の追求、美しさの面でのそれを要求した要因の考察など、古代アンデス染織文化研究史上、一つの画期的な論文といえる。しかし、意識して時間的なデータを省いたため、古代アンデス染織文化の一般的あるいは総合的な特質はよくとらえているにもかかわらず、文化史的な発展の経過がわからないという欠点がある。Vreeland の場合は、同じような問題提起を行いながら、自身が染織の専門家であるためか、むしろ資料のより客観的・科学的な分析の必要性という方向へ行き、染織品研究を、土器や石器研究のレベルまで引上げる必要を論じている。筆者の場合は、染織文化を染織品をめぐる行われる、さまざまな人間の活動の複合としてとらえ、それを古代アンデスの文化史の中に位置づけるという形をとって、Gayton の論文に欠ける点を補おうとするものである。

本論に入る前に、染織文化複合をとらえる視点に簡単にふれておく。

まず最初に、染織品を作り、使うという技術複合がある。そこには、繊維・染料その他の原材料、道具、製作技術、そして染織品の用途・機能などの項目が入る。つぎに、染織品をめぐる社会・経済複合がある。原材料や製品の供給と分配に関する交易、作業の専門化・分業、製品の交換・贈与・租税などにかかわる機能、その他、埋葬・婚姻・成年式などの儀礼における機能など、さまざまな側面が考えられる。最後に、

染織品を視覚的表現の手段とする、美術複合とでもいうべきものがあげられる。表された文様の主題、様式、色の組合せと選択、素材や染織技法などがこれにかかわってくる。この3つの複合は、それぞれ独立し完結しているものではなく、常に相互に関連を持ち、全体として染織文化を構成している。

古代アンデスの染織文化を研究する際には、常にこの3つの複合に含まれるさまざまな側面をその視野におき、さらにその時間的な発展という文化史的視野、地域的な差、染織文化以外の文化との関係などを考慮して進めて行かなければならない。

以下、紀元前8,500年前の先土器時代から、紀元16世紀のインカ時代にわたる、10,000年におよぶ古代アンデス染織文化の発展の経過を追いながら、そこに現れたいくつかの問題点をあげてみたい。なお、文中に使った古代アンデス文明の時代区分、年代はつぎのとおりである [LANNING 1967: 25]。

後期ホライゾン	1,476-1,534 A. D.
後期中間期	1,000-1,476 A. D.
中期ホライゾン	600-1,000 A. D.
前期中間期	B. C. 200- 600 A. D.
前期ホライゾン	B. C. 900- 200
草創期	B. C. 1,800 } 1,500 } -900
先土器時代	
(I ~ VI)	? { B. C. 1,800 1,500

## II. 先土器時代の染織文化

現在までに知られている中央アンデス地帯最古の染織品は、北高地の Callejón de Huaylas にある Guitarrero Cave 出土のもので、C-14 による年代は B. C. 8,500~5,700 とされている [ADOVASIO & LYNCH 1973]。計68点の資料の大部分は紐類であるが、それを編んだ袋、籠が少例ある。また、タテ糸とヨコ糸で構成された布の断片が2例報告されている。素材は分析中であるが、綿ではないとされている。注目されるのは、これらの繊維製品と共に、木製の丸い棒、断面が凸レンズ形の棒が出土していることで、報告者はこれらが織機の一部であった可能性を示唆している。

海岸地方の先土器時代の遺跡を調査している Engel は、Paracas, Asia の2つの遺跡で、多数の埋葬人骨を発見した。埋葬遺体は、染織品が未発達であった B. C. 5,000年~2,000年という時代にあっても、その多くが milkweed、龍舌蘭などの植物からとった繊維を蓆状に編んだ敷物や動物の毛皮で包まれ、時にはやはり上記の植物繊維で作った帽子、衣服などを身につけていたことが明らかになった [ENGEL 1960, 1963]。

また Engel は、これらの調査を通じて、先土器時代の遺跡に綿が出土するものではないものがあることに注目し、先土器時代を、さらに無綿期と有綿期に分けることを提唱している [ENGEL 1957]。綿は、遅くとも B. C. 2, 500年頃には利用されていた [ENGEL 1965: 28]。綿が使われ始めても、当時の初期農耕・海産物採集に依存した生活にあまり大きな変化はなかった。しかし、染織文化の面では、繊維素材として重要な綿が栽培化され、その供給がより確実なものになったことは、きわめて大きな意義を持っているといえる。

先土器時代末期の B. C. 2, 000年頃になると、Huaca Prieta, Asia など出土した資料からみて、染織文化がある程度発達していたことがわかる。技術的には、編物がいぜんとして90%以上も占めているが、少数の平織り、浮き織り、綴織りがみられる [BENNETT & BIRD 1960: 268; ENGEL 1963: 130]。Huaca Prieta の遺物はいずれも小型で、網類を除き用途ははっきりしない。Bird はショールあるいは腰布ではなかったかと推測している。Asia では、108 cm × 73 cm の大きな布、縁飾りのある布の他に、帯、腕輪、帽子(?), 袋などが出土している。また中央アンデス地帯特有の狩猟具である投石具がみられる [ENGEL 1963: Fig. 140]。

この時期の染織文化の中でとくに注目されることは、赤・青に染めた色糸による縞文様の他に、鳥、カニ、ヘビ 魚、人物などを表した文様が初めて現れることである [BIRD 1963: Fig. 2~7; ENGEL 1963: Fig. 192]。文様は編物、織物の両者に施され、製作過程で1本1本の糸を動かすという、細かな手先の作業により表出されている。これらはいずれも直線的な様式化された線で表され、また、双頭のヘビなどのシンメトリックなものが多い。これらは、まだ十分に細い繊維が得られない段階での編物、織物に施されたという技術的な制約のためであるとの考え方もあるが [BIRD 1963: 32]、同時に出土したひょうたんに、刻線と焼画で施された文様にも同じ様式が見られることから、当時すでに一定の視覚表現の様式が生まれていたと考えた方がよいであろう。

以上のような先土器時代の染織文化をみる時、以下の点が注目される。1) 死者を染織品あるいはそれに類するものに包んで埋葬する風習。2) 素材としての木綿の栽培の開始。3) 染織品を視覚的表現の手段として使うこと。4) 文様が、細かい手先の作業で糸を動かすことにより表出されること。この4つは、古代アンデス染織文化の伝統として、16世紀のインカ時代にまで続いた。

### Ⅲ．草創期以降の染織文化

中央アンデス地帯では、紀元前2,000年紀の前半に、トウモロコシ農耕、土器製作が開始され、本格的に文明形成へと歩み始める。この時期以降の染織文化複合の発展

を考える時、木綿と並んで素材として重要な獣毛の利用、紡績・製織の技術とその道具の発達、染料や媒染剤の利用、衣服その他への染織品の用途・機能などの問題を取りあげていかなければならない。

**獣毛の利用** 獣毛として利用されたのは、アメリカ大陸の中で、アンデス高地にのみ棲息している、vicuña (*Vicugna vicugna*), guanaco (*Lama guanicoe*), alpaca (*Lama pacos*), llama (*Lama glama*) の4種のラクダ科動物の毛である。この中、前の2種は野生であるため、主として利用されたのは後の2種、とくに良質で長繊維の毛を持つ alpaca であった。alpaca, llama がいつ頃家畜化されたかは、未だに解明されていない。しかし、B. C. 1,000年頃のものとする、北海岸 Virú 川流域の「llama の神殿」とよばれる遺跡で、犠牲として捧げられたと思われる2体の llama の埋葬骨が発見されていること [STRONG & EVANS 1952: 27-34]、東京大学アンデス地帯学術調査団が調査した、北高地の Kotosh 出土の獣骨の分析の結果、同じくB. C. 1,000年頃を境に、ラクダ科動物の骨が、鹿の骨よりも多くなるという報告 [WING 1972: 340] などから、少なくとも B. C. 1,000年頃には家畜化されていたものと推定できる。

獣毛の利用に関する別の問題点は、これらの動物がいずれも、標高 3,000 m 以上の高地を棲息地とし、海岸低地では飼育が困難であるということである。海岸地方で利用される場合、当然高地との交易を考える必要がある。中央アンデス地帯の文化を考える場合、海岸低地、高地、さらに東斜面の熱帯降雨林地帯という、3つの生態学的環境の全く異なった地域の相互関係が、きわめて重要である。獣毛は、高地と海岸低地との関係を具体的に示す数少ない資料として、重視されねばならない。

現在までに知られている最古の獣毛例は、中部海岸 Supe 出土のもので、前期ホライゾンに属す [O'NEAL 1954]。量はきわめて少ないが、その多くが赤色に染められていることは注目される。染料の報告はないが、一般に獣毛は木綿に比べて、媒染を使わずに染色しやすい。このことが、染織品の多様化という方向への発展の中で、海岸地方で獣毛が求められた一つの理由であるかもしれない。同時代の Ancon, Cupisnique から染織品が出土しているが、すべて木綿である。しかし、この2つの遺跡から出土した資料の量が少ないので、まだ断定的なことはいえない。前期中間期になって、北・中部海岸では相変わらず使用例は少ないが [BIRD 1952: 356; 角山 1964: 4]、南海岸の Paracas Necropolis 文化では、木綿地に4~6色の獣毛を使って美しい刺繍を施した豪華なマントが数多く作られた [BIRD & BELLINGER 1954; Tello 1959]。また、やや時代の下る Nazca 文化では、木綿：獣毛：木綿+獣毛の比率が31：36：33であり、獣毛の比率がかなり高いといえる [O'NEAL 1937]。中期ホライゾンは、その成立に獣毛の交易あるいは確保が関与していると想定され [藤井 1976b]、獣毛の利用は頂点に達する。この時期は、綴織りが最も発達した。しなやかで発色の良い獣

毛をふんだんに使って、技術的にも美術的にも優れた製品が作られた。後期中間期は、Chancay 文化の例を見ると、木綿のレース、染物などが発展し、全般的に規格化された大量生産化が進むいっぽう、染織品の多様化がはかられ、獣毛の使用量も決して減少してはいない。後期ホライゾンのインカ期には、alpaca, llama の家畜が、国家、神殿あるいは村共同体に属したとされ [Rowe 1946: 267]、このことは、これらの動物の重要性を示す 1 つの証拠といえよう。

**道具** 染織関係の道具としては、紡績具、織機、編物や刺繍用の針などがある。紡績具としては、細い木や竹の棒を、土・石製その他の紡錘車に通しただけの簡単なものが使われた。最古の例としては、先土器時代の Asia のものがあるが [ENGEL 1963: Fig. 16, 17]、一般に、遺跡から紡錘車が出土するのは、前期ホライゾン以降である。紡績具の形は最後まで変わらず、現在でも原住民の間で使われている [角山 1971]。Gayton は、250 個の紡錘車が副葬された墓が発見されていることから、紡錘車製造の専門職の存在を考えているが [GAYTON 1961: 16]、これはおそらく特異な例で、通常は紡ぎ手自身により作られたものであろう。

織機は、膨大な染織品の量に比べ、出土量がきわめて少ない。学術的な発掘調査で出土し、報告されたものは皆無に等しい。しかし、博物館などに収蔵されている未報告の例や、現在のこの地の伝統的な織機から推定して、後帯機 (back-strap loom) が使われたことにほぼ間違いはない。ただ、現在南高地では水平機 (horizontal loom) が使われており、この型式の機が使用された可能性も残っている。とくに、後帯機は構造上織り手の手の届く範囲 (通常 70~80 cm) で織巾がきまってしまう。出土資料の中に、1 m を越す巾のものがみられることは、水平機も含めた他の機の存在も考えなければならないであろう。

前述のようにタテ糸とヨコ糸から構成される布片は、先土器時代から出土している。しかし、これらが織機を使って作られた確証はない。知られている最古の機は、前期ホライゾンとされる Paracas 出土のものである [ENGEL 1966: 125]。しかしこの例は、1 本の棒にかけられたタテ糸に、ヨコ糸が通っているだけで、タテ糸をいっせいに上下する仕掛け (綜統) はみられず、本来の織機かどうかかわからない。いずれにせよ染織品の製織技術の方からみて、織機は前期ホライゾンのある時期に考え出されたことは間違いのないと思われる。

後帯機の大きな特徴の一つは、タテ糸を織り手の腰にまわした帯で引っばるという構造のため、腰を前後することによりタテ糸の張り具合が自由に調節できるという点にある。そのため、細かい糸の操作を手先で行うことにより文様を表出するのにきわめて適している。手先で文様を表出するのは、前述のように先土器時代に始まる古い伝統であった。後帯機の使用開始と共に、古代アンデス染織文化はその多様な製織技術の発展への基礎ができたといえてよいであろう。



この地域で後帯機が専ら使われた理由は、上述のような文様構成のための利点ということがまず考えられるが、もう一つ、この機が何本かの短い棒の組合せだけで作られているという、構造上の理由が考えられる。現在では、征服後旧大陸から移入されたユーカリが多くみられるが、それを除くと、アンデスの海岸・高地とも樹木の類はきわめて貧弱である。とくに真直ぐに伸びた木はまず見られない。このような材料の面での制約が、旧大陸のような大きな棒を持つ足踏式織機が発達しなかった一つの理由であると考えられる。

**染め** 古代アンデスの繊維染色は、すでに先土器時代に赤・青の染糸が使われて以来の伝統を持つ。染めはとくに前期中間期の南海岸でかなり発達し、Paracas Necropolis では250の、Nazca では190の異なった色調の糸が使われている [O'NEAL 1937, 1942]。色の表出は、素材繊維の色調（獣毛はもちろん、木綿にも白から褐色にいたるいくつかの自然色を持つものがあつた [BENNETT & BIRD 1960: 262]）と、各種の染料の組合せで行われたと思われる。染料・媒染の研究はきわめて遅れており、現在までに青色染料のあい (*Indigofera suffruticosa* Mill), 赤色染料のえんじ虫 (*Coccus cacti*), アカネ科の植物 (*Rubiacea relbunium*), 紫色染料の貝の一種 (*Concholepa*) などが使われたことがわかっているにすぎない [GAYTON 1961: 115]。その他、推定染料としては、動物、植物のものがいくつかあげられている [角山 1977: 216]。現在、原住民が利用するものとしては、くるみ、はんの木の皮(茶)、その他二・三の植物性のもの(現地名のみで一般名、学名は不詳)、泥を利用した鉄媒染などがある〔石原氏の御教示による〕。古代アンデス染織品の染料を分析することにより、染料の産地と使用地との関係をつかむことが可能である。その結果は、中央アンデスの地域間の交易の問題解決に大きく貢献するのは明らかである。染料の分析・同定の研究は、大きな課題の一つとして今後に残されている。

染めに関する別の角度からの問題は、染物の製作とその染色技術である。糸あるいは素材ではなく、織上った布を染めた染物は、織物に比べ発達しなかった。古いものとしては、前期ホライゾン末期の Paracas Cavernas 文化に属する描染めの布がある。平織りの木綿地に、濃淡の茶、赤色を使って、両手に杖を持つ人物、猫科動物、S字文などの典型的な Chavín 文化の文様を描いたものである。染めの技法としては、描染めの他に、かすり染め、ろうけつ染め、しぼり染めなども知られていた。この中、かすり染めの資料はきわめて少なく、現在までに数例知られているにすぎない。技術的にみてもあまり発達していなかった [VANSTAN 1957]。染物は、前期中間期の Nazca 文化である程度の発達を見せたが、本格的に製作されたのは後期中間期になってからである。とくに Chancay 文化には、かすり染めを除いた染物の優品が多い。

後期中間期になって増加するのは、織物に比べ染物の方が早く仕上がるので、この時代に染織品の大量生産化が進んだことと関係があることが推定されるが、いっぽう

で、製織技術が中期ホライゾンまでにほとんど出そろってしまったため、布に表す文様表現を、より多様化しようという動きの中から出たものとも考えられる。

**製織技法** 製織技法は、すでに指摘したようにきわめて発達していた。技法としては、平織り、浮織り、縫取織り、紋織り、二重織り、綴織り、縫合せ織り、羅、絹、紗、綾織りなどがあり、その他に、オープンワークやレース、刺繍、各種の編物さらに組物など、現在手織りの技術として知られているものの、ほとんどすべてに及んでいる。はじめにも述べたように、染織品の技術的研究はかなり進んでおり、それぞれの技法の細部にわたる説明、技術史的な展開に関しては、多くの報告、論文があるのでここではこれ以上触れない<sup>2)</sup>。

**実用的用途・機能** 染織品の用途・機能としては、衣服、装飾品の他に、貯蔵・運搬用の袋や紐、漁撈用の網や紐・糸、さらにこの地域に特有のものとして、狩猟あるいは家畜群の追立てなどに使われた投石具の紐など、実用としてのものがまずあげられる。

衣服は前述のように、すでに先土器時代から知られていた。前期ホライゾンのものとしては、Supe 出土のマント、帯、ベールなどが報告されているにすぎない [O'NEAL 1954: 112~130]。この時代の石彫、土器などに表された人物も、裸か、わずかにふんどしあるいは短かい腰布、腰や頭に巻いた帯、首のまわりの襟状の飾り(?)、肩から背中につらしたマントなどをつけているにすぎない。前期中間期になると、衣服はかなり発達した。染織品の報告例は、Paracas Necropolis 文化、Nazca 文化を除きほとんどないが、Mochica, Nazca 文化の土器に、当時の服装がかなり具体的に表されている所から判断できる。男子は、袖付きあるいは袖なしの短かい貫頭衣、短かいパンツあるいはキルト状のスカートをつけている例が多い。足首までの長い貫頭衣もある。女子の衣服は、足首までの長い貫頭衣に限られていた。ターバン状や大きな飾りのついた頭巻きの帯は、男子のみが使用した。貫頭衣を基本としたこの衣服の組合せは、インカ時代まで続いた。インカ時代にはこの他に、防寒・防水用として、男子は大きなマント、女子は肩掛けを用いたが、これらは高地のみで、海岸地方では使用されなかったであろう。このように、古代アンデスの衣服は、長方形の布を2枚(袖付きの場合は小さいものをさらに2枚)、首と腕の出る所を残して袋状に縫い合せただけの簡単な貫頭衣を基本としていた。大きな布を裁って衣服に仕立てることはなかった。この方法は徹底しており、人形の衣服など小さなものも、あらかじめその寸法に合った小さな布を織って作られていた。これは、後帯機による製織のため、幅・長さとも大きな布が作りにくいという技術的な要因の他に、この地域は利器としての金属器、石器が未発達で [藤井 1976a]、布をうまく裁つことができなかったことにもよ

2) 技法の詳しい説明は、以下の文献を参照されたい [D'HARGOURT 1962; BENNETT & BIRD 1960; 貞末 1963; 角山 1964; 泉 1964; 中島 1970a]。

るのであろう。もちろん、石製・金属製のナイフは使われているので、裁って裁てないことはない。しかし、古代アンデスにおける布は、縫合されることはあっても、ついに裁って使うということとはなかった点は、一つの大きな特徴として注目される。

衣服以外の染織品としては、先土器時代以来の伝統を持つ漁網が、先スペイン期を通して使われ、この地域での漁業の重要性を示している。前述の衣服にはポケットがなかったため、小物入れとしてあるいは coca の葉を入れるための小さな袋が多く使用された。女子も袋を使ったが、時には小さなハンカチ状の布に包んで持歩くこともある。貯蔵・運搬用の袋類は、出土資料の中には報告された例がない。しかし、現在高地の原住民の間で、alpaca の毛を使い、後帯機で織った costal とよばれる袋、やはり alpaca の毛で作った長い組紐が使われている。これらが先スペイン時代からの伝統を引くものであることは十分考えられる。投石用の紐は、すでに先土器時代後期にはじまり、現在まで使われているが、その形態、作り方にはほとんど変化がない。

染織品の用途・機能としては、以上のような実用的なもの他に、視覚的な表現の手段としての機能、あるいは社会階層、所属グループなどのシンボル、埋葬習慣に伴うものなどの社会的な機能があげられる。さらに大きくいえば、今まで時どき触れてきたような、生産と使用に関連する交易の問題など、経済的な面での機能ということもここに含めて考えられるであろう。

**視覚的表現の手段** 視覚的表現の手段として染織品を使うことは、前述のように B. C. 2,000年頃の先土器時代末期から始まっていた。そこに表された動物、人物などが、単なる実体の投影なのか、あるいは何らかの象徴性を持っているのか、残念ながらわからない。しかし、その緻密でシメトリックな文様構成、双頭のヘビという観念的な表現方法などは、当時すでに、文様表現において一定の様式的なパターンを持っていたことを示している。また、扱われた主題、表現方法は、以後16世紀のインカ時代にまで、この地域の伝統として続くものであった。

前期ホライゾンのものとしては、Paracas の描染め、Supe の綴織りに表された、猫科動物の文様が注目される。前期ホライゾンを形成した Chavín 文化は、きわめて宗教色の強い文化であった。とくに、その信仰の中心であった猫科動物、あるいはその象徴としての牙、S 字文、十字文などは、染織品ばかりでなく、土器、石彫などに表されている。前期中間期以後は、紡績、染め、製織技術などの発達と相俟って、表現の方も多彩になる。中でも、Paracas Necropolis 文化の大型のマントは、その色彩、全面に施された細かい刺繍など、古代アンデス染織文化の1つの頂点をなすものを作り出した。しかし、そこに扱われている文様の主題は、おそらく前代の猫科動物から発展したと思われる、「神話的人物像」といわれるものの徹底的な繰返しである。この傾向は中期ホライゾンにも著しい。中期ホライゾンは、南高地の Tiahuanaco

に起源を持つ **Huari** 文化が、全地域に広がった時代であるが、**Tiahuanaco** にある「太陽の門」とよばれる石彫に刻まれた、両手に杖を持つ人物、あるいはその両側にみられる **Angel** と名付けられた人物の姿が、この時期にとくに発達した綴織りの文様として、最も多く登場する。

このように、染織品に表された文様は、先土器時代以来の伝統を持つ、鳥、ヘビ、カニ、魚などの動物、前期ホライゾンに始まる猫科動物とその発展形である神話的人物が、インカ期を除く古代アンデス全期を通じて表され続けた。インカ期には、それ以前の表象的な文様に代り、幾何学的な文様が主流を占める。インカ時代の表象的表現から幾何学的表現への移行は、染織品のみならず土器においても認められる。しかし、この現象が何に起因するのか現在の所説明できない。ただし、幾何学文は、インカ以前にもかなり見られ、とくに階段文、波形文が多く表されている。

**シンボルとしての機能** 社会階層あるいは所属グループのシンボルとしての染織品の機能は、染織品自体の分析を通じてではなく、むしろ **Mochica** 文化の土器に描かれた文様、あるいは征服後にスペイン人により書かれたインカ文明の記録などによって想定されている。**Mochica** 文化の場合、王や貴族あるいは神官などとよばれている支配階層、戦士、飛脚、漁民や農民などの一般人の服装の文様に差がある [BENSON 1972: 107~108]。また、戦闘の捕虜が衣服をはがれて裸にされているのも、シンボルとしての衣服の機能を示すものと考えられる。しかし、**Mochica** の場合でもインカの場合でも、階級あるいは所属グループのシンボルとしては、頭飾りがより重要であった。インカの場合、皇帝を示すものは衣服ではなく、むしろ頭飾りにつけられた房飾りであったとされている [Rowe 1946: 258]。

**埋葬儀礼に伴う機能** 埋葬に伴う風習と染織品の結びつきは、古代アンデス染織文化の発展を考えると、かなり重視されねばならない。当時の死後の観念がどのようなものであったか不明であるが、衣服などの染織品のみならず、土器、装飾品、さらに食料と思われる植物まで副葬されている所から、死後も現世と同じ生活を送ると考えていたことが推定される。ここで一つ問題となることは、はじめに述べたように、現在知られている古代アンデスの染織品の大部分が、埋葬された死者のつけていたものであることである。これらの染織品は、死出の晴着として特別に作られたものなのか、日常使用していたものを使ったのか、墓以外で出土した資料がほとんど知られていないため、判断できない。いずれにせよ、埋葬する時には、美しい染織品を身につけるといふ風習が、古代アンデスにおける染織文化の発展の一つの原動力になったことは、十分に考えられる。

**その他の機能** 古代アンデスの染織文化をめぐる問題としては、その他にすでに触れた交易の問題の他、インカ期にみられる租税としての機能、供儀における供え物、葬礼、婚礼などにおける贈与などが指摘されているが [MURRA 1962: 170]、これら

に関してはインカ以前の資料が決定的にないので、今回はふれない。しかし、将来の問題として上記のような視点から先インカの染織品を分析する必要がある。

#### Ⅳ. お わ り に

以上、中央アンデス地帯の染織文化を、その時間的発展の経過を追いながら、いくつかの側面を問題としてとりあげてきた。中央アンデスの染織文化は、石器文化、木器文化と並んで、きわめて古い歴史を持っている。とくに、先土器時代から早くもある程度の発展をみせていることは注目される。そこには、それ以降の時代にまで伝統として受継がれた、いくつかの要素が認められる。一般に、染織文化は旧大陸でいう新石器文化複合の一つとして、定住農耕、土器の製作と共に始まると考えられているが、ここでは、先土器時代の原初農耕・海産物採集経済の段階ですでに発展し始めていた。中でも、染織品の視覚的表現の手段としての著しい発展が認められることは、古代アンデス文明の特徴の一つといえる。

古代アンデス文明における染織品の発達の一因として、Bird は、綿・獣毛という繊維素材の存在、衣服を必要とする気候条件、安定した農耕生活の3つをあげている [BENNETT & BIRD 1960: 257]。この3つは、まさに染織文化が成立するための必要条件であるのはいまでもないが、その他に、視覚的表現の主な手段としての機能、埋葬に伴う染織品の役割りなどが、その発展の大きな要因となったことが考えられる。とくに視覚的表現の手段としては、この地域では紙がついに発明されず、それに代る樹皮、皮などもほとんど重視されなかったため、軽くて遠くまで持運び可能なものとしては、染織品がほとんど唯一のものであった。Paracas 出土の Chavín 期の描染めの布、中期ホライゾンの Tiahuanaco 文化起源の神像を表した布などは、宗教的イメージが広く中央アンデス各地に広がる際の重要な役割りとして、染織品が使われたことを示すものであろう。また、最近のエスノヒストリカルな研究に基づく、インカ時代の染織品のさまざまな社会経済的機能の問題 [MURRA 1962] も、先インカ時代にまでさかのぼって考えていかなければならない。

現在遺されている膨大な古代アンデスの染織品は、海岸地方出土のものがそのほとんどを占める。海岸地方でも、北部はまれに降雨があり、また砂中に含まれている硝石分のために、染織品の保存が中・南部海岸に比べ悪い。高地のものは、気候条件のためほとんど遺されていない。現在までに発掘された資料が、古代アンデスで生産された全体の何割ぐらいに相当するのか、全くわからないが、実際の量は現存資料の数十倍、あるいは数百倍と考えても決して誇張ではないであろう。この量はもちろん、先土器時代からインカ時代までの数千年の年月を考えれば、あるいは当然のことかもしれない。しかし、今まで述べてきたような古代アンデス染織品の特異な発達を考え

れば、当時の人びとが染織品の生産に費した時間、持っていた情熱は感じられる。

最近のエスノヒストリカルな研究から、インカ時代における染織品の重要性、さまざまな機能が判明している。インカ文明は、先インカ文明の集大成といった面を多分に持っており、そこに見られる要素は、おそらく先インカ時代からの伝統を引継いだものであることは、十分予想される。このようなことを考えた時、多量の染織品を作り出した原動力と、それに応えた生産力との間の動的な関係は、従来のような技術論・様式論の観点に偏った研究から引出すことは不可能である。今後の古代アンデス染織文化の研究は、はじめにも述べたように、技術複合、経済複合、美術複合の3つを相関的にとらえることを基本とし、その時間的発展、地域差、他の資料との関係を常に考慮した、全体的な視野にたったものへと向かう必要がある。

## 謝 辞

末筆ながら、この小稿を書くにあたり、筆者の6度にわたるペルーでの調査の度にお世話になった、リマ市の天野博物館の天野芳太郎館長をはじめ、同館で染織品の研究を行っていた多くの研究者に教えられた点が多い。これらの方がたにお礼を申し上げる。また、関西学院大学の亀田隆之教授、本館の友枝啓泰助教授からは、貴重な文献を拝借した。友枝助教授には、素稿を読んで頂き多くの御助言を頂いた。現代の伝統的な染織文化に関しては、石原繁野さんに教えて頂いた点が多い。記して感謝の意を表する。

## 文 献

- ADOVASIO, J. M. and T. F. LYNCH  
1973 Preceramic Textiles and Cordage from Guitarrero Cave, Peru. *American Antiquity* 38 (2): 84-90.
- BENNETT, W. C. and J. B. BIRD  
1960 *Andean Culture History*. 2nd and revised ed., American Museum of Natural History, Handbook Series No. 15, New York.
- BENSON, E. P.  
1972 *The Mochica*. Thames and Hudson.
- BIRD, J. B.  
1948 Preceramic culture in Chicama and Viru. *American Antiquity* 13 (4) pt. 2: 21-28.  
1952 Textile Notes. In W. D. Strong and C. Evans Jr., *Cultural Stratigraphy in the Viru Valley, Northern Peru*, pp. 357-360, New York.  
1963 Pre-ceramic Art from Huaca Prieta, Chicama Valley. *NAWPA PACHA* 1: 29-34, Berkeley.
- BIRD, J. B. and L. BELLINGER  
1954 *Paracas Fabrics and Nazca Needlework*. Textile Museum, Washington.
- D'HARCOURT, R.  
1962 *Textile of Ancient Peru and Their Techniques*. Univ. of Washington Press, (Original Publication in French, 1934).
- ENGEL, F.  
1957 Sites et établissements sans céramique de la côte péruvienne. *Journal de la Société des Américanistes*, n.s. 46: 61-155, Paris.

- 1960 Un groupe humain datant de 5000 ans à Paracas, Pérou. *Journal de la Société des Américanistes*, n.s. 49: 7-30, Paris.
- 1963 A Pre-ceramic Settlement on the Central Coast of Peru: Asia Unit 1. *Transactions of the American Philosophical Society*, n.s. 53 (3), Philadelphia.
- 1965 *Historia elemental del Perú antiguo*. Lima.
- 1966 *Paracas: Cien siglos de cultura peruana*. Lima.
- 藤井龍彦
- 1976a 「中央アンデス・ワヌコ地域の石器文化」『国立民族学博物館研究報告』1(2):272-304。
- 1976b 「中央アンデス Middle Horizon の成立について」『国立民族学博物館研究報告』1(3): 565-591。
- GAYTON, A. H.
- 1961 The Cultural Significance of Peruvian Textiles: Production, Function, Aesthetics. *Kroeber Anthropological Society Papers*, No. 25, pp. 111-128, Berkeley. (Reprinted in J.H. ROWE and D. MENZEL (eds.) *Peruvian Archaeology*, 1967).
- 泉 靖一
- 1964 『アンデスの芸術』中央公論美術出版。
- KROEBER, A. L.
- 1949 Art. *Handbook of South American Indians*, vol. 5, pp. 411-502, Bulletin 143, Bureau of American Ethnology, Smithsonian Institution, Washington.
- LANNING, E. P.
- 1967 *Peru before the Incas*. Englewood Cliffs, New Jersey.
- MASON, J. A.
- 1957 *The Ancient Civilization of Peru*. Pelican Books A. 395.
- MURRA, J. V.
- 1962 La función del tejido en varios contextos sociales y políticos. *Actas of the 2nd Congreso de Historia del Perú*, t. 2, Lima (Reprinted in J. V. MURRA, *Formaciones económicas y políticas del mundo andino*, 1975, pp. 145-170).
- 中島章子
- 1970a 「アンデスの染織物の構成要素について」『民族学研究』35(2):148-153。
- 1970b 「古代アメリカの染織」大系世界の美術第7巻『古代アメリカ美術』別冊, 学習研究社。
- n.d. 「アンデスの遺産, 解説」『古代インカの芸術』小原流芸術参考館。
- O'NEAL, L. M.
- 1937 Archaeological explorations in Peru, Part III: Textiles of the Early Nazca Period. *Anthropology, Memoirs of Field Museum of Natural History* 2 (3): 119-218, Chicago.
- 1942 Textile Periods in Ancient Peru, II: Paracas Cavernas and the Grand Necropolis. *Univ. of Calif. Publ. in Amer. Archaeol. and Ethnol.* 39 (2): 143-202, Berkeley.
- 1954 Textiles. In G. R. WILLEY and J. M. CORBETT, *Early Ancon and Early Supe Culture*, pp. 84-130, New York.
- ROWE, J. H.
- 1946 Inca Culture at the Time of Spanish Conquest. *Handbook of South American Indians*, vol. 2, pp. 183-330, Bulletin 143, Bureau of American Ethnology, Smithsonian Institution, Washington.
- 貞末堯司
- 1963 「南米ペルーの先コロンブス期の染織工芸」『古代学講座』9:107-133, 学生社。
- STRONG, W. D. and C. EVANS Jr.
- 1952 *Cultural Stratigraphy in the Viru Valley, Northern Peru*. Columbia Studies in Archaeology and Ethnology, vol. 4, New York.
- SQUIER, E. G.
- 1869 A Plain Man's Tomb in Peru. *Frank Leslie's Illustrated Newspaper*, vol. 28, No. 704, March 27. pp. 21-22. (Reprinted in J. H. ROWE and D. MENZEL (eds.), *Peruvian Archaeology*, 1967).

TELLO, J. C.

1959 *Paracas*, Lima.

角山幸洋

1964 「アンデス古代文化における染織文化の展開」泉靖一(編)『プレインカ服飾図録』三一書房。

1971 「アンデスの羅」『愛泉女子短期大学紀要』6:1-22。

1972 「アンデスの綾」『愛泉女子短期大学紀要』7:1-39。

1973 「アンデスの紋織」『愛泉女子短期大学紀要』8:1-12。

1974 「続アンデスの紋織」『愛泉女子短期大学紀要』9:1-10。

1975 「アンデスの紡績」『愛泉女子短期大学紀要』10:57-78。

1977 「アンデスの染織」角山幸洋(監)『アンデスの染織』同朋社, pp. 213-234.

VANSTAN, I.

1957 A Peruvian Ikat from Pachacamac. *American Antiquity* 23 (2): 150-159.

VREELAND, J. M.

1974 Procedimiento para la evaluación y clasificación del material textil andino. *Arqueológicas* 15: 70-96, Lima.

WING, E. S.

1972 Utilization of Animal Resources in the Peruvian Andes. In S. IZUMI and K. TERADA (eds), *Andes 4: Excavations at Kotosh, 1963 and 1966*, Univ. of Tokyo Press, pp. 327-354.